The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	外国人専門支援員のニューカマー教育支援に関する一考察
Author(s)	舘, 奈保子
Citation	大阪大学教育学年報. 2013, 18, p. 97-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24312
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

外国人専門支援員[(1)]のニューカマー教育支援に関する一考察

舘　　奈保子

【要旨】

1980年代以降、日本の学校にニューカマーの子どもが増え、それに伴い彼／彼女らに対する教育支援が行われるようになった。多様な立場の教育支援者を対象とした研究は蓄積されていった一方で、そのエスニシティについて注意は払われてこなかった。そこで、本稿では、公立小学校の中国にルーツをもつ専門支援員に焦点をあて、彼女が学校に参入していく過程でを描き、彼／彼女らの教育支援の課題と可能性を明らかにする。

分析によって明らかになったことは、潜在的に存在していた資源や、集まってきた資源をつなぐポジションに位置する人物がいることがニューカマーの子どもの教育支援をより充実させるということである。つまり、外国にルーツをもつ人が教育支援に関わることによって、学校という「社会的結節点」に集まってきた人たちの「結節点」の役割を担うことができるといえる。しかし、そのようなことは、学校に理解ある他者がいることによって可能になるという点と中国人専門支援員が学校に正規のスタッフとして参入しても日本人と中国人専門支援員の間に存在する権力の非対称の構図は何も変わっていないという点には留意しなければならない。

1. 問題の所在と課題の設定

1991年から行われている文部科学省の「日本語教育が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」によると、2010年は約29,000人となっており、調査が開始された1991年と比べると、その数は5倍以上に増加している。このような状況に伴い、この20年の間に、国は外国人児童生徒に関する教育施策を打ち出してきた。その教育施策は、これまで「日本語教育が必要な外国人児童生徒」が在籍する学校への加配教員の配置と日本語教室の設置という形であったが、現在さらにもう一歩踏み込んで、公立学校において教育課程の中で行う日本語指導の在り方が検討されようとしている。

ニューカマーの子どもの増加とそれに対する教育施策が出されることにより、外国にルーツをもつ子どもの教育支援に関わる人の人数も増え、多様化した。ニューカマーの子どもの問題が認識され始めた頃は、その問題は日本の学校文化と結びつけて論じられた（例えば、太田 2000）。そこで、学校文化を体現するものとしてクラス担任や教科担任教員に注目した研究（例えば、森田 2007）や学校内における彼らに関わる国際教室や日本語教室担当の教員に着目した研究（例えば、児島 2006）が出てきた。そして、彼らの教育支援は、学校外でも行われ、地域の学習支援室で、支援に関わるボランティア・スタッフに着目した研究も出てきた（例えば、清水 2006）。

多様な立場の教育支援者を対象とした研究は蓄積されていった一方で、教育支援者のエスニシティについて注意は払われてこなかった。これまでの研究の対象者は、そのほとんどがマジョリティである日本人で、

外国にルーツをもった人々が通訳、あるいは日本語支援員といった様々な立場で、ニューカマーの子どもの教育支援に関わっていることは、実践の場では周知のとおりだが、彼／彼女らに焦点を当てて論じた研究は管見の限りほとんどない。しかし、多くの地方自治体では、通訳ボランティア派遣制度を制定し、学校はニューカマーの子どもの編入や保護者の授業参観の都度、その制度を利用している。つまり、今日の学校教育において、彼／彼女ら抜きの教育支援は考えられない状況である。

また、三浦（2012）が「ニューカマーは社会構造上不利な立場に置かれ、限られた資源しか持っていないことも確かであるが、（中略）必要な資源を作り出す存在でもある」と指摘するように、自ら資源を作り出す存在としてニューカマーを捉えるならば、彼／彼女らに注目する意義は十分にあると考えられる。

そこで、本稿では、公立小学校の外国人専門支援員に焦点をあて、彼／彼女らの学校における役割を明らかにしたい。具体的には、学校の部外者という立場から、学校の中に位置付くまでの一連の過程の中で、彼女がどのような葛藤を抱いているのか、そして彼女が学校に位置付くことによって、学校にどのような影響を与えるのかをインタビューと参与観察で明らかにする。

2. 先行研究の検討

ニューカマーの子どもの教育支援に関する研究の初期のもとして、恒吉（1997）や太田（2000）がある。恒吉は学校文化の特徴を「一斉共同体主義」と名付け、それがニューカマーの子どもたちに大きな同化圧力をかけていると論じる。太田も同様の問題を「奪文化化教育」という言葉を用いて、日本の学校文化を批判している。

また、首都圏三つの地域に位置する小学校で参与観察を行った志水・清水（2001）は、日本の学校・教室において、ニューカマーの子どもが「日本人化」し、あるいは「日常化」することで実態として見えにくくなるのに加え、教師自身がニューカマーの子どもの異質性を子ども固有の文化的背景に関連づけて「見ようとしない」ことを指摘している。いずれの研究もニューカマーの子どもの異質な文化が見えにくくなるメカニズムを学校文化とその体現者の教師という観点から取り扱ったといえる。

児島（2001）は、教師は教師でも、学校文化とニューカマーの子どもたちの文化のはざまで自らをどのように位置づけるのかについて常に決定を迫られる立場である日本語教師に着目した。これまでのように学校文化の体現者としての教師ではなく、「行為的主体（an agent）」として教師を捉えることで、日本語教室という場が「文化的境界地」となっていて、そこから「場」を変容する可能性があることを明らかにした。また、清水（2006）は学校外の教育支援の場、地域の学習教室に着目し、マクロレベルでの社会的状況のもとで、ミクロレベルでの支援者（日本人）と学習者（外国人）の間にある権力の非対称性について検討した。

いずれの研究においても、ニューカマーの子どもの教育支援は必要であり、それを行うのは日本人側であることが暗黙の前提となっている。しかし、前節でも述べたように、教育支援を行う主体は日本人だけではなくなっている。学校における多文化状況が当たり前と思われる中で、自身がマイノリティであると同時に、ニューカマーの子どもたちの教育支援に関わる人々（通訳や専門支援員など）が、どのように学校という場に参入し、どのような葛藤をもっているのか、明らかにする必要があると考えられる。それにより、これまでほとんど取り上げられてこなかった当事者の声に耳を傾けることは、ニューカマーと学校文化研究において意義は大きいと思われる。

以上の点を踏まえた上で、次節では今回の調査の対象や方法について述べる。次に、中国人専門支援員が公立小学校に参入し、日常世界を形成していく過程を描き（４節）、続く５節では学校に位置付いた後につ

いて記述・分析していく。そして。それらを踏まえ６節では考察を行う。

3. 調査の対象と方法

本稿では、長い間ニューカマーの子どもたちの教育支援に関わってきた中国人専門支援員王先生（仮名）を主な調査対象者とした。王先生は中国北京出身で、26年前留学で来日した。関西圏のZ市における外国人児童生徒の教育支援に携わり始めたのは、留学中のことである。Z市教育員会は土曜日に帰国子女児童生徒や、外国人児童生徒のために補習教室を開いていた。Z市教育委員会は王先生が通っていた大学に中国人の学生を紹介してほしいと打診し、王先生が補習教室の運営に関わるようになった。それがきっかけで、王先生はＺ市の外国人児童生徒の教育支援に携わり、今日まで教育支援に関わってきている。

ここで簡単に王先生が現在勤めるX小学校の概要について説明する。X小学校の生徒数は約200人となっており、ほとんどの学年が１学年１クラスと学校規模は小さい。そのうち、外国にルーツをもつ児童は、2012年10月現在、X小学校には合計29名（中国系25名、フィリピン１名、バングラディッシュ３名）となっており、全校児童数の約15％を占める。X小学校に通う外国にルーツをもつ児童の家族は大きく３つのグループに分けられる。ひとつは、中国帰国者を血縁にもつ家族である。90年代に、X団地に移り住んで以降、親類を頼ってX団地に移り住む人々が増えた。二つめは、近年、X小学校の周辺の大学で働く研究員として来日する家族である。最後に、日本に労働者としてやってきたニューカマー家族である。

X小学校におけるニューカマーの子どもの支援に関して、日本語指導加配教員が１名から２名配置されている。しかし、日本語指導といっても、日本語指導の専門家ではなく、その担当は一般教員から選ばれる。授業時間内の児童に対する支援体制は、別室指導ではなく「入り込み授業」となっている。放課後には、ニューカマーの子どものために国際教室が開かれている。国際教室の主な活動は、国語の本読みのチェックや宿題のチェックなどである。夏休み、冬休みの数日間にも、国際教室は開かれ、休みの期間中に出された宿題を行い、さらに昼食をみんなで作る実践がなされている。

本稿で主に用いた方法は、フィールド調査とインタビューである。本稿では中国人専門支援員が学校に参入する過程を描き出すということを目的としているので、フィールド調査は妥当だと考えられる。また、中国人専門支援員が学校に参入するのとフィールド調査を開始したのが同時期のため、インタビュー調査を行うことで、以前の状況の把握という足りないデータを補った。実施期間は、2007年４月から約５年間で、平均して週１回のペースで実施した。行事にも極力参加し、データを収集した。インタビューは2008年に、中国人専門支援員、国際学級担当教員に行った。

4. 周縁的な位置から「共振者」の出現

王先生がX小学校に関わり始めた時はどのような関わりだったのかと尋ねると、王先生は次のように語った。

大学の先生の推薦で、私ここに（X小学校）に顔を出した。その時は、E小学校とN中の子とR中の子とX小学校の子が在籍していて、X小学校は、さちこちゃん（仮名）のおじさんとおばさん。で、そういうきっかけでX小学校にかかわるきかっけになって、で、あとは三者懇談とかそういう臨時的に呼ばれることが年に何回かあって、それでこっちに顔を出して。一般的に学校に来ることはなかった。

（2008. 11. 8）

王先生の語りにあるように、決まった回数の授業通訳以外は、三者懇談時など臨時の時だけ学校へ行き、普段は一般的に学校には行かないという学校との関わり方は、現在外国にルーツをもつ人々が通訳として教育現場に関わる一般的な関わり方だといえる。多くの通訳ボランティアは複数の学校をかけもちすることになり、一度通訳ボランティアに行った後しばらくは関わらないといった状況も起こりうる。**「あちこち行くのいつも一人ぼっちだもの。」（2008. 11. 28）**と語るように、いつも単独の行動となり、孤独な状況だったことがわかる。

このような不安定な状況の中で、学校の教員とコミュニケーションをとることや、学校へ要望を述べることに対して次のような考えを持っていた。

私の方からああしてほしい、こうしてほしいって言うのもあまりないです。立場は私は自分自身わかっているから。（中略）冷たい先生もいれば、体制整えていない学校があっても、私決して文句言わない。しないのも当たり前。してもらうの（は）当たり前じゃない。してもらうのはすごく感謝してますけど。

（2008. 11. 8）

王先生は自分の立ち位置を十分理解し、自分の方からニューカマーの子どもに対する支援に関して、あえて学校に要望しない。その場の状況に合わせて、それぞれの学校の教員とコミュニケーションをとってきた。訪問した学校の支援体制や教員の関心のあり方を見極め、前に出過ぎないように気をつけながら、子どもに関する報告を行っていた。それは、学校の教育支援に、「しないのも当たり前、してもらえると感謝」と考えているからだ。教育支援をしてもらうニューカマーの子どもの側に立って王先生は述べ、あくまでもニューカマーの子どもは学校の「好意で」支援してもらっていると考えていることがわかる。

このような学校との関わりが2007年に一転する。2007年にX小学校に９名の新入生が入学してきたことがきっかけで、通訳者以外に「家庭専門支援員」というポジションが設けられ、王先生がそのポジションにつくこととなった。

＊：王先生が本格的にXに来出したのが３年（2005年）位前？

白石先生：そうそうそう。そんな感じ。それまでは全然、はじめは授業通訳で、たくさん関わってくれるようになったでしょ。中国から直接の子がばーっと増えた。で、その時に言葉が通じないからというので、授業通訳いう制度を作ってと組合で要求して、それで市教委で作ってくれて、王さんにその仕事をやってもらって。だから、そういうのがあって、今は家庭支援になったり。授業通訳と家庭支援という両方の立場で王先生も関わるようになってくれたから、うちの学校に関わってくれることが多くなったんです。でも、身分なんて不安定なものでしょ。王さんなんかね、どこ所属っていうわけじゃないですから。

＊：ないですね。

白石先生：だから、あえて言えば市教委から？

＊：なんか、すごい不安定…。

白石先生：だから、けっきょくそんな感じですよね、ずーっと。市の職員だったら職員で、こうちゃんと雇用してもらえればいいんだけど、そうじゃないでしょ。でも、まだ、一応そういう立場（専門支援員）っていうのができたっていうので、一つかなと、一つ進歩かなあと。それまでは何もなくて来たから。「王さん来て」って。「誰々がトラブル起こしたから来て」って（頼んで）。そうして、

（王さんが）来たら、こんなことで来てもらったって、（後で）市教委にこっちから報告した。

（白石先生：2008. 11. 28）

現在では、外国にルーツをもつ人々が通訳ボランティアに登録し、学校から要請があれば派遣されるといった通訳ボランティア登録制度が各市町村、あるいは都道府県単位で作られている。その制度の設立の過程はそれぞれ異なるが、X小学校のあるZ市については、現場の教員から教職員組合へ要望を出すという下からの要望によって、授業通訳派遣制度ができたという。その時の要望を出した中心人物の１人は、元国際学級担当の白石先生（仮名）だった。そして、今回も、一般的に生活が厳しい家庭に対して支援を行う家庭専門支援制度を利用して、外国にルーツをもつ子どもの家庭教育支援員のポジションをX小学校に設けるように要望した。

王先生がX小学校に深く関わるこのようなきっかけを作った白石先生はX小学校の国際学級を立ち上げた教員であり、国際学級担当としてのキャリアも長い。2007年度に退職となったが、2008年度も国際学級の運営に関わっていた。白石先生はもともと中学校体育科の教員であったが、中学校教員が過員ということで、X小学校に異動となった。小学校に異動になったものの、中学校教員免許では担任を持つことができず、空いているポジションとして国際学級担当に指名された。当時何もかもが初めてのことで何をしていいかわからず、他の教員からもアドバイスをもらえず、学校において疎外感を感じていたという。このような経験を経たからこそ白石先生は王先生の立場の不安定性や孤独感を理解し、共感したのである。すなわち、白石先生は王先生の心情的に共感する「共振者」[(2)]（広田 1997）であるといえる。

そうして、王先生はこれまで教員に対して、一歩ひいた関わりだったのが、一歩踏み込んだ関わりへと変わっていった。

お昼休みの時間に、国際学級に行くと王先生が今日の放課後にある母語教室の授業準備をしていた。しばらく王先生と話をしていると、白石先生と現国際学級担当の鈴木先生（仮名）がそれぞれ教室に入ってきた。すると最近気になる２年生のはるか（仮名）についてのことを話しだした。

王：はるか、昨日の国際学級で、はさみを使って遊んでいて、はさみをヂヨンちゃん（仮名）が持ってきてくれたのに、片付ける時に「はさみ、ヂヨンちゃん持ってきたんだから、片付けーや。」って言ったんです。

鈴木先生：そんなこと言ったんですか。

白石先生：それはだめだね。

王：最近、こういう傾向があるんですよ。クラスで緊張をしていて、常に自分を守ろうとしているんです。でも、慕ってくれている友だちに対しては、甘えるんでしょうね。きつい言葉で話してしまうんです。そんなことしていたら、周りから人がいなくなってしまいますよね。

（フィールドノーツ：2008. 11. 13）

国際学級は放課後に開かれるので、一番早く授業が終わる１年生でさえ５時間目が終わらないと国際教室にやってこない。しかし、王先生を始め、国際学級担当教員たちは、お昼休みからこの教室に集まってくる。王先生は母語教室の授業準備をし、他の教員たちは国際学級の床を掃いたり、棚を整理したり、教室環境を整えている。そのような作業の中で、各教員は子どもの情報交換を行っている。特に気になる子どもについ

ては、話を国際学級担当者の中だけに留めず、学級担任に話を持っていく様子がしばしば見られた。そして、そのような関わりをもつことによって、王先生自身の語りも変化している。

先生たちも手一杯っていうことを考えると、こっちも、あ、これでも言わない方がいいかな、でもね、とかいろんなことがあります。今、さいわい、白石先生や鈴木先生とか（いるから）、ちょこちょこ彼らに報告する。

(2008. 11. 28)

学校の教員にニューカマーの子どもの話をすることに対して、まだためらいをみせながらも、現在は、国際学級担当の教員には気になったことを報告しているという変化がこの語りからわかる。X 小学校に、継続的に関わることにより、白石先生のような「共振者」の存在は、王先生の教育支援者としての意識の変化に大きな影響を与えたといえる。

5. 王先生が抱える葛藤

では、王先生が学校の中に位置づくことで、何が学校にもたらされ、どのような葛藤に直面することとなったのだろうか。

5.1 教員と保護者の狭間の立場

＊：じゃあ、王先生が来て、変わったことってあるんですか？

白石先生：そりゃあ、もう保護者との距離はずいぶん近寄ったなあ。そのいつも、何かあったら王先生が学校にいるから、保護者も来やすいという。

＊：なるほど。

白石先生：学校に来さえすれば、なんかわかるのじゃないかとか。なんか教えてくれるんじゃないかとか。

（白石先生：2008. 11. 28）

上記の白石先生の語りから、王先生が毎日学校にいることで、ニューカマーの保護者の距離が近づいたことがわかる。日本語を話せない保護者にとって、学校と連絡をとることに心理的に大変高いハードルが存在している。そのような状況の中で、同じ言語を話すことができる王先生が学校にいるということは、保護者にとって安心感をもたらす。一方、学校の教員側にとっても、ニューカマー保護者と連絡がとりにくい中で、保護者から歩み寄ってくれることにメリットを見出している。そして、それは中国系保護者のための懇談会を開催するということにつながっていった。王先生は自ら学校と保護者をつなぐ立場に立ち、双方に求められる情報、あるいは有益だと思われる情報を提供することによって、学校に新たなつながりを取り入れさせ活用させるようになった。

その一方で、王先生は保護者との距離の変化にとまどう。

最近、担任の先生にこう言われて、養護担任の先生にこう言われて、管理職の先生にこう言われて、言われるたびに保護者に伝えたら、そうしたら、保護者は私じゃなくて、学校の先生に電話してきて。「王先生の思いもわかりますけど、でも…」って。

（フィールドノーツ：2010. 5. 28）

上記のエピソードは、それぞれの立場の人から言われたことを保護者に伝えていたが、あまりにも様々なことを伝えすぎたために、保護者が混乱してしまって、学校側に連絡してきたというものである。このような出来事が起こったのは、王先生の立場が変わったからだといえよう。以前の通訳ボランティアだけの立場の時は、学校側の言葉を保護者に伝えていたが、その立ち位置は保護者に近かった。それは**「1000人以上の人と関わってきて、一つとして同じ関わり方ができない」**と語るように、それぞれの個人に寄り添って、関わってきていたといえる。しかし、学校の中に入ると、学校でも様々な立場の人がいて、様々な考え方を王先生に伝えてくる。王先生は学校の中に入り、知らず知らずのうちに学校の影響を受けているのである。保護者の中には、そのような立場の違いを敏感に感じとまどう人々も出てきた。

5.2　曖昧な職務の境界線

王先生が学校に毎日来ることによって、ニューカマーの子どもたちに対して、より手厚い教育支援を行うことが可能になった。それを顕著に示すエピソードの１つは、母語教室を開くということである。週５日X小学校に通うことになった王先生は、自ら母語教室を開くことを学校に提案したのである。

日本生まれの子は中国語よりも日本語の方がうまいです。だいち（仮名）やともや（仮名）は「自分は日本人なのになんで学ぶ必要があるのか」と言っているけれども、（母語教室に通うことで）中国語の発音はうまくなっています。それはやっぱり、一週間に一度でもやることに意味があるといえます。

（フィールドノーツ：2008. 7. 4）

以上の語りから、王先生は日本生まれの子どもが増え中国語を話すことができない子どもが増えるなかで、少しでも彼らの親が使う言葉である中国語に触れる機会を提供しなければならないと考えていることがわかる。こうした考えの裏側にはこれまで通訳ボランティアとしての経験があった。通訳ボランティアとして、さまざまな学校段階の家族と関わる中で、王先生は学年が上がるにつれ、**「完全に、（親と）深い話、しません」**というように、家族内でコミュニケーションがとれていないことに気付いたのだ。特に、高校段階になって、保護者とコミュニケーションがとれないため、進路の相談をするために、親と子どもの間の通訳として王先生が入ることがあった。このような事態を起こさないためにも王先生は、積極的に自らの持っている資源を生かして、教育支援を行おうとしていった。

そのような王先生の積極的な働きぶりは、ニューカマーの子どもたちへの教育支援につながるとともに、**「すごく支えてもらっている」**というX小学校の他の教員の語りに表れるように、王先生の存在はありがたいものとなっている。一方、そのような真剣に職務を全うしようとする姿勢や行動ゆえに、王先生はジレンマに陥ることとなる。

2006年度末に長年国際学級の担当をしていた白石先生が定年になると、それ以降国際学級担当教員は毎年交代となった。2009年度までは引き継ぎの形で、白石先生も国際学級の運営に関わっていたのだが、2009年度以降は新しい国際学級担当教員のみとなった。そうなると国際学級の運営やニューカマーの子どもに対する教育支援は、王先生が一番の経験者だという雰囲気になっていった。それは次のようなエピソードに表れている。

佐藤先生：多文化のつどい、そろそろですね。

王先生：そうですね。

佐藤先生：現地会場までどうやっていきましょう？
王先生：現地まではいつもバスを借りていっていますよ。
佐藤先生：じゃあ、今年もそれで行きますか。

（フィールドノーツ：2010. 5. 13）

毎年春と秋にZ市の在日外国人教育協議会が行う「多文化のつどい」という行事にX小学校の国際学級に通う子どもたちは参加している。毎回の行事に、王先生は国際学級担当の教員とともに子どもたちを引率している。立場だけをみると、王先生は通訳と家庭専門支援員という立場であり、このような行事の引率を行う必要はなかった。しかし、王先生は通常の業務外のことでも、子どもたちのために引率を行っていた。このような事例は、他の場面でもしばしば見られた。

腰鼓舞（中国の小太鼓を使った踊りの一種）の練習が校内で行われる「多文化のつどい」の発表のために昼休みに行われている。王先生は、低学年の子どもをきちんと整列させるために、子どもたちの間を走り回っている。

（フィールドノーツ：2009. 11. 29）

この場合でも、腰鼓舞の指導は厳密に言えば、王先生の職務外の仕事といえる。しかし、腰鼓舞を紹介したのは王先生であり、X小学校の国際学級の運営に関わっている以上、関わらないということは王先生の選択肢の中にはない。このように、X小学校のニューカマーの子どもの教育支援に一貫して関わっている王先生が本来与えられた仕事以上のことを、いわば「自己犠牲的に」行うことにより、X小学校の教育支援は充実していった。しかし、**「本当にどこまでやって、どこまでやらないのかと考える」**という王先生の語りに表れているように、教育支援に携わるにつれ、王先生自身、職務と職務外の線引きを引くことが難しくなっている。

また、教育支援に関われば関わるほど、現在のポジションに対してジレンマを抱いていく。

私は中高の（教員）免許しか持っていないので、小学生を別室で指導することはできないの。それに、基本、特別支援の子どもと同じように、ここの学校の方針だから（取り出し授業はできない）。

（フィールドノーツ：2010. 10. 18）

王先生は渡日間もない子どもには、一部の授業では一般の児童と一緒に授業を受けるよりも、渡日の子どもを取り出して授業を行った方がいいと考えていた。そこで、王先生は取り出し授業を行いたいのだが、小学校教員免許という公的な資格を持っていないため、取り出し授業を行えなかった。また、X小学校のあるZ市ではこれまで障害を持っている子も原学級で他の児童と一緒に授業を受けるという指導方針のもと授業が進められてきた。外国にルーツをもつ子どもに対しても同様の方針がとられているので、取り出し授業の実現には他の教職員の同意が必要となった。しかし、教員として雇用されていない以上、王先生の立場から何もいうことができなかったのだ。

小学校教員免許という公的な資格という制約とこれまでのZ市のマイノリティの子どもに対する教育方針という制約は、教員として雇用されていない王先生一人では、どうすることもできないものとなっている。**「教育支援を行っているのに、学力に関する職員会議に声をかけられたことがない」**という言葉が象徴するよう

に、王先生は時には、周縁的な立場に立たされていることを自覚させられるのだ。

6. 考察

本稿では、中国人専門支援員が学校に位置づいていく過程に注目し、彼女の内面にどのような変化をもたらしているのか、また彼女の参加により学校にどのような変化をもたらしたのかということを描き出した。以下、本稿で見出された知見を整理していこう。

まず、彼女が学校に参入する過程において、これまで所属が明確でなく、通訳ボランティアとして一人で関わってこなければならなかったが、白石先生という「共振者」がいることによって、居場所ができた。意識の面では、教育支援に対して「やってもらって感謝」というようなスタンスから、学校に位置付くことによって、意識の変化がみられ、一歩ひいた態度から積極的な関わりへと変わっていった。

第二に、中国人専門支援員が学校に位置づくことによって、大きく分けて２つの葛藤を抱くことになる。

一つは、保護者との距離の変化についてである。学校と保護者との距離を近づける橋渡し的な役割を担った一方で、中国人専門支援員と保護者との距離の取り方が難しくなった場面が見受けられた。通訳ボランティアのみの時は、それぞれの家族に寄り添いながら、彼らの言葉を代弁していくだけで良かった。しかし、学校の言葉を代弁することが求められるようになり、それを伝えていくことで、知らず知らずのうちに学校文化を体現するものとなっていく。それを敏感に感じ取った保護者は、とまどい、中国人専門支援員もとまどいを隠せなかった。

もう一つは、教育支援に力を入れれば入れるほど、その職務の境界が曖昧になっていってしまうことである。中国人専門支援員が学校に位置づくことにより、これまでできなかった母語教室の開設などニューカマーの子どもに対する教育支援はとても充実していった。一方で、中国人専門支援員ががんばればがんばるほど、中国人専門支援員に「任せる」という状況が生まれた。中国人専門支援員のニューカマー児童の教育支援という固定された役割、さらに中国人専門支援員の「自己犠牲的な」頑張りにより、学校はニューカマーの子どもの教育支援をある意味、学校全体で取り組む優先課題と位置づけることがなくなったといえる。それに対し中国人専門支援員は自分の実際のポジション（周縁化された立ち位置）と職務の境界の不確かさに悩みをかかえていた。

以上の知見を踏まえた上で、どのような示唆を得ることができるだろうか。ニューカマーと学校文化に関して述べるならば、これまでのニューカマーの教育研究では、学校文化は固定的･性的なものだと捉えられ、学校文化の変容のイメージを具体的に描くことができなかった。その要因として、学校を構成する人々の主体性が十分に考慮されてこなかったことにあることが指摘された（児島 2001）。

しかし、学校文化の変容を促す人々は従来から学校を構成する人々（教員やニューカマーの子ども）だけでなく、外部から参入してくる人々にも十分にその可能性はあると考えられる。清水（2006）が描き出しているように、学校文化に「抵抗」する資源を得られる場は、学校内部だけでなく学校の外部からももたらされることが可能であるのだ。

学校はそもそも「社会的結節点」（広田 1997、藤原 1996）としての機能を果たす諸機関の一つとして考えられる。社会的結節点としての機能を果たす場では、様々な人々が出会い、それぞれの感情や利害や価値の葛藤のぶつかりあいの中で、新たなネットワークや新たな価値が創造される。

今回の事例からいえることは、潜在的に存在していた資源や、集まってきた資源をつなぐポジションに位置する人物がいることがニューカマーの子どもの教育支援をより充実させるということである。つまり、外

国にルーツをもつ人が教育支援に関わることによって、学校という「社会的結節点」に集まってきた人たちの「結節点」の役割を担うことができるといえる。

しかし、一方で、留意しなければならない点もある。一つは、そのようなことが可能になるのは、学校に理解ある他者がいることによって可能になるという点である。本稿の事例にあったように、制度的な受け入れ条件の整備と「共振者」の存在が望まれる。もう一つは、中国人専門支援員が学校に参入したからといって、マジョリティである日本人とマイノリティの中国人専門支援員の間に存在する権力の非対称の構図は何も変わっていないという点である。それは置かれたポジションによるものだともいえるが、本稿で指摘したように、中国人専門支援員のように個人的な好意や熱意のもとで、少なくない犠牲をはらって教育実践に関わる人も多いのである。マイノリティである人々が「消耗品」（リリアン 2006）のように使われるかもしれないという危険性が潜むことを、マジョリティが自覚的にならなければならない。

本稿では、マイノリティである外国人講師の教育支援の関わりから、その課題と可能性についてその一端を指摘したが、このような人々に着目した研究の蓄積はさらに求められる。それはまた別の機会としたい。

〈注〉

(1) 本稿でさす「外国人専門支援員」とは、外国にルーツをもった専門支援員のことをいう。教員免許を所有していることが専門支援員の雇用の条件となる。Z市教育委員会に雇用され、1年ごとに契約が行われる。王先生は中学高校の国語の免許を所有している。

(2)「共振者」とは、マイノリティとして問題を抱えつつも、主体的状況に適応しようとする人々の「生き方」に心情的に共感し、あるいは仕事のうえで多様なつながりをもち、その生活をサポートする受け入れ側の人々をさす。

〈引用文献〉

藤原法子 2008『トランスローカル・コミュニティ―越境する子ども・家族・助成／エスニック・スクール』、ハーベスト社。

K. C. Kim and Hurh. W. M.、1984 “Adhesive Sociocultural Adaptation of Korean Immigrants in the U.S. An Alternative Strategy of Adaptation、” I. M. R. 、vol. 18。

児島明　2001「ニューカマー受け入れ校における学校文化「境界枠」の変容―公立中学校日本語教師のストラテジーに注目して―」『教育社会学研究第69集』、東洋館出版、p. 65-83。

児島明 2006『ニューカマーの子どもと学校文化―日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』、勁草書房。

広田康生 1997『エスニシティと都市』、有信堂。

中島葉子 2007「ニューカマー教育支援のパラドクス―関係の非対称性に着目した研究―」『教育社会学研究第80集』、東洋館出版、p. 247-267。

三浦綾希子 2012「フィリピン系エスニック教会の教育的役割―世代によるニーズの差異に注目して」『教育社会学研究第83集』東洋館出版、p. 91-211。

文部科学省 2012「日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の 在り方に関する今後の検討の方向性等について」
http://www. mext. go. jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2012/05/17/1320782_1.pdf（2012/4/15 アクセス可）

太田晴雄 2000『ニューカマーと日本の学校』、国際書院。

リリアン・テルミ・ハタノ 2006「在日ブラジル人を取り巻く「多文化共生」の諸問題」植田晃次・山下仁『共生の内実―批判的社会言語学からの問いかけ―』、三元社、p. 55-80。

志水宏吉・清水睦美編 2001『ニューカマーと教育』、明石書店。

清水睦美 2006『ニューカマーの子どもたち―学校と家庭の間の日常世界―』、勁草書房。

清水睦美 2011「権力の非対称性を問題化する教育実践―社会状況とマイノリティ支援の関係を問う―」馬渕仁編著『「多文化共生」は可能か』、勁草書房、p. 43-62。

高橋朋子 2009『中国帰国者三世四世の学校エスノグラフィー―母語教育から継承教育へ』、生活書院。
恒吉僚子 1996「多文化共存時代の日本の学校文化」『講座学校6 学校文化という磁場』、p. 216-240。
X校 2008『1年のあゆみ』。
Z県人権教育協議会 2008『第38回 Z県人権教育研究O大会 実践報告集』。

A Study on Education Support for "Newcomer" Children

TATE Nahoko

This paper aims to examine the problems in and potential of education support for foreigners.

Since the 1980's, the number of newcomer children in public schools has increased, as has the number of teachers assisting their education. While numerous studies have been conducted on education assistants from varies backgrounds, foreign teaching assistants have drawn little attention. Most of the studies targeted Japanese assistants, while few studies exist on foreign teaching assistants. In this paper I focus on Chinese education assistants and analyze the problems in and potential of teaching support for foreigners by drawing on her getting engaged in schooling.

The findings from this study show that a person who can connect cultural and social capitals that potentially existed or were gathered is valuable when providing education support to newcomer children. In short, it is possible for foreign teaching assistants to assume an important role as a "connecting point." However, a few words of caution need to be provided. First, there need be other staff members in the school, who can understand situation of foreign teaching assistants. The other is that there should not be any change in the power asymmetry between Japanese and Chinese teaching assistants, even though Chinese assistants become regular staff members in the school.